

井下和夫詩集『河は流れる』（ふらんす堂）

### 静かに詩が；；洗練されたエスプリ、

洲 浜 昌 三

第三詩集です。これまでの詩集には、『地球の時間』（詩学社）、『海と山の間』があります。

どの詩集にも一貫しているのは、日常の中で、ふと心に触れた感慨を、中庸を得た洗練された言葉で、静かに語る、という詩に対する姿勢です。

不思議な出会いでした。初めて名前を目にしたのは公募入選作品集『島根文芸』です。平成三年には「ダム湖」が金賞でした。翌年、大田高で職場が一緒になりましたが、退職されて益田へ移住され、遠い人になりました。数年後、当時愛読していた『詩学』を読んでいると、投稿研究作品欄に、井下さんの詩と名前があり、平成十二年の二月号には、日和聡子さんの詩と名前も、同じ欄に載っていて、自分の目を疑いました。日和さんも井下さんも邑智町出身です。次の年には、井下さんは「詩学（新人賞）」（六名）に選ばれ、写真入りで紹介されました。この作品研究欄は、六人の詩人の批評が対談形式で掲載され、好評でした。「二十代半ばから詩の如きものをノートに書きつけるようになり」「外部に詩を発表するようになったの

は五十過ぎてから」と書いておられます。詩に安定した確かさがあるのは、長年の文学や詩に対する知識やセンスが蓄積されているからでしょう。声高に叫ばず、意表を突く展開、表現をせず、押し付けがましくなく、深追いせず、静かに語って、行間から詩を立ち上げる。ここに洗練されたエスプリを感じます。大学でフランス文学を専攻された影響があるに違いないと推測します。

### 「在るがままに在る」

求めるだけの若さだった／だが齢を重ねると  
求めても遠のくばかりの目標は／無きに等しいものと  
解った／求めることには切りがなく／在るがままを保つこともできない

（一連省略）

侵されず／欲を捨てたら／在るがままに在ることができ  
きる／たとえ在るがままに不満でも／変えることができ  
なければ／在るがままに在るしかない／それもまた  
在るがままなのだから

この詩は井下さんの現在の心境なのでしょう。則天去私ではありませんが、日本人の一つの共通到達境地なのでしょうか。